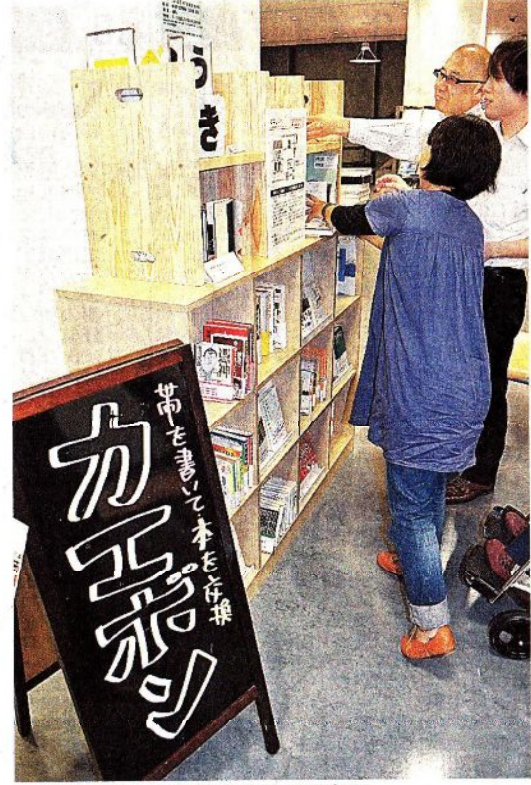


つながれ カエボン

好きな本「とりかえっこ」交流

朝日新聞 13(H25). 7. 11



「カエボン」棚に本を並べる部員
たち=兵庫県伊丹市のことば蔵

伊丹の図書館部活も

自分の好きな本を、誰かの好きな本と「かえっこ」してみよう——。兵庫県伊丹市の市立図書館「ことば蔵」が、本を使った交流を進めている。名付けて「カエボン」。利用者による部活動も生まれた。

カードに感想

カエボンのルールは、①自分のお気に入りや、誰かに薦めたい本を図書館に持ってくる②受付でもらった帯に推薦文を書き、背表紙の裏に白紙の感想カードをはる③1冊を寄贈すると、ほかの人が薦める1冊を借りられる④返却時は、なるべく感想カードに記入する。

一般の蔵書と違い、貸出期間は設けておらず、利用者の善意で成り立っている。職員が持ち寄った

10冊から始まったカエボン棚に、今は150冊が並び、



昨年9月には、利用者による「カエボン部」ができた。現在、部員は約30人。月1回、テーマを決めて本を持ち寄って語り合い、棚に収める。部長の会社員三鼓由希子さん(46)は「寄贈するために、同じ本をもつ1冊買う人もいます。自分が味わった感動を誰かに伝えたいと思う人は多い」。部活の場は、1階の交流スペースで、飛び入り参加もできる。

ことば蔵は、かつては酒蔵が並んだ伊丹市の中心部にある。白壁に黒い屋根の外観で、酒蔵を模した。昨

年7月、市役所や裁判所が集まる官庁街から移転したのを機に、カエボンは始まった。田中茂館長(47)によると、「街と人と図書館をつなぐいい方法はないか」と、職員に市民も加わる運営会議で考えるうち、カエボンの案が出た。

小学生を対象に一定以上の本を読むと一日図書館員になれたり、市内の店主などを講師に専門的な知識や技術を学ぶ「まちゼミ」を開いたり、従来の図書館の枠に収まらない企画を打ち出してきた。

恋のイベント

今月27日には、20歳以上の未婚の男女の出会いを創出しようと、「恋のカエボン」という催しも開く。男女12人ずつの参加者が「恋」に関するおすすめ本を持ち寄って図書館で語り合い、飲食店に。意気投合すれば、連絡先とともに本も交換する予定だ。企画した職員の小寺和輝さん(26)は「一本があれば、ただ一緒に食べたり飲んだりするより、会話が弾むのではと思いました」と話す。

ことば蔵が開館して7月1日で1年がたった。図書館の利用者は2011年度が32万7千人だったのに対し、移転後は今年6月末までで40万人を超えた。

みんなで楽しむ読書が人と人とのつながりを生むことを信じ、ことば蔵の挑戦は続く。(山下弘展)